歴史地震
第34号(2019) 225頁

［講演要旨］

慶長九年十二月十六日(1605年2月3日)地震津波の高知県室戸市，および大分県米水津(よのうづ)の被害状況

都司嘉宣[1]・今井健太郎[2]・大木涼子[2]・岩瀬浩之[3]

[1]深田地質研究所，[2]JAMSTEC，[3](株) エコー

§1. 慶長九年十二月 16 日(1603Ⅱ3)地震津波

四国，九州の海岸での慶長九年地震(1605)の独立した津波記録の所在地を図1に示す．徳島県海岸については都司ら(2017)に報告した．今回の報告では，高知県室戸市，および大分県佐伯市米水津(よのうづ)での状況を述べる．

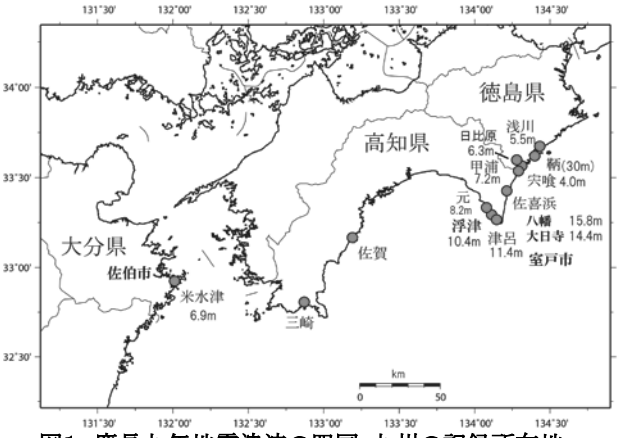

図1 慶長九年地震津波の四国・九州の記録所在地

§2. 高知県室戸市での津波浸水高さ

佐喜浜　室戸市佐喜浜の談義所の僧・阿闍梨暁印は『置文写』という文献に「潮入所ハ談義所之履脱迄，(中略)八幡宮の御権前高欄迄」と記録している．この「談義所」は現在の大日寺の本堂である．GPS 測量で本堂前の参道の標高 13.9m を得た．「靴脱石」上面はこれより 0.6m上方にあると推定して，浸水高 14.4m を得た．

八幡宮は大日寺の北東約 0.6km の国道沿い山側にあったが，昭和 40 年代に海側の現在地に移転した．移転前の八幡宮の敷地面の高さは 12.4m であり，「高欄」の高さは現在の建物から推定して地上 3.4mにあったと推定され，ここでの浸水高さは 15.8m と推定された．佐喜浜の両点で津波浸水高さの値は相対差は 7%にとどまっている．

津呂　『置文写』には，「隣在所を聞くに，西寺東寺の麓の浦分にも男女四百人余死す」と記されている．この文に言う「東寺」は室戸岬背後の丘陵上の四国 24 番最御崎寺(ほつみさきじ)を指す．その麓の浦分とは室戸市津呂を指す(『高知県の地名』，平凡社,1983)．GPS 測量で津呂の市街地標高 8.4m を得たが，地上冠水 3.0m として，浸水高を 11.4m とする．

浮津　『置文写』に言う「西寺」は四国 26 番金剛頂寺を指している．「西寺の麓の浦分」とは浮津のことである．市街地標高は 7.4m と測定され，地上冠水を 3.0m として津波浸水高は 10.4m と推定される．

元　宝永地震津波(1707)の土佐藩の記録『谷陵記』に，「慶長九年潮ヨリ六尺卑(ひく)シト云フ」と記されている．都司ら(2013)によると，宝永津波の元での浸水高は 6.4m であるから，慶長津波の元での津波浸水高は 8.2m と推定する．

§3.大分県米水津(よのうづ)浦代の浸水高さ

『米水津組浦代浦・成松庄屋文書』に宝永地震津波(1707)について，「浦白は養福寺までも汐差込，(中略)石壇二ツ計残り申候．(中略)浦白ニテ拾八人死ス(中略)」と記した後に，「其往古百年以前もケ様成汐満申候事，年寄たる人皆咄ニ承候間，能々心の用心可有候」と記されて居る．100 年前にもこのようなことがあったと，年寄りたちは話している，というのである．これは慶長九年の津波のことに間違いあるまい．これを裏付けるのは，岡村ら(2006)による米水津の龍神池の湖底堆積物調査結果である(図2)．

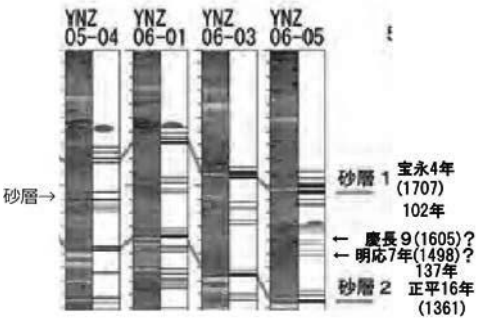

図2 龍神池の湖底堆積物の津波痕跡(岡村ら，2006)

ここには，宝永津波(1707)と正平津波(1361)の明白な津波痕跡の間に二度の津波痕跡があり，上の方は慶長九年津波と推定される．少なくとも養福寺石段最下段まで浸水したとして，津波浸水高を 6.9m とする．

参考文献:都司ら(2013)，(2017)は「津波工学研究報告」,30 および 34．岡村ら(2006)は地震学会秋要旨 A027．